竹脇潔先生を偲んで

守　　隆　夫（動物学教室）

本学名誉教授，竹脇潔先生は去る１月16日，東京都多摩老人医療センターにて逝去されました。享年82歳でした。

先生は明治38年富山市のお生まれで，東京帝国大学理学部動物学科を昭和３年に御卒業後，ただちに同学科の助手となられました。以後，講師，助教授と進まれ，昭和22年教授となり，同40年定年退官されるまで37年間本学に勤務されました。

先生の御専門は動物学とくに実験形態学・内分泌学で，我国におけるこれら学問分野の創始者として，世界的に高く評価された数々の業績をあげられました。明治・大正時代のいわゆる博物学を中心とした日本の動物学界の流れの中で，早くから哺乳類（主としてネズミ）を用いて近代的な実験動物学の道を歩まれました。なかでも「哺乳類の幼児期におけるホルモンの影響」に関する研究では，先生の研究室は世界的メッカとなり，現在も門下生達が各地でさらにそれを発展させて世界の学界をリードしています。

先生はまさに研究一途の御生活で，日曜も休日もなく，朝８時前には研究室に来られ，まずネズミの世話をされてから研究を始められ，決った時間に帰られる規則的な生活を送られていました。時々，新しく進学した大学院生が先生より早く登校したりすると，先生は翌日，普段よりさらに早く研究室に来られるといった茶目っけもあって，私も先輩から，５分でもいいから先生より遅く来いといわれたものです。お若い頃は厳しい先生であったとのことですが，包容力のあるお人柄で，門下生には変わり者の多いことでも有名でした。先生は自から寸暇を惜しんで研究に打ち込まれることで範をたれるといった教育方針で，あまり細かいことは言われなかったとのことです。ある大学院生の場合，ほとんど先生に研究の進展を話さないため，さすがの先生も心配されておられたらしく，ある日，彼の部屋に様子を見にいかれたところ，一心不乱にネズミの手術をしているところだったので何も言わず自室に戻られ，あとで助手に「仕事をしておるから，ええじゃろう」とおっしゃって，二度とその学生にデータを見せるようにとは言われなかったとのことです。

御退官まじかに先生の門下生となった私にとっては，厳しい先生といった感じはまったくなく，温顔に常に笑みをたたえて，若い我々の勝手な議論を聞いておられ，時おり適切な助言をして下さいました。何かの折，食べ物の話になり甘党の先生と意見がちがったので「先生はお酒をのまれないから，酒の肴の味がおわかりにならないのです」と申し上げたら，「奈良漬なら三枚までは食べられる」とおっしゃった事は今でも強く印象に残っております。この話には説明が必要で，以前先生の同僚の教授が来られた折，お二人で「私は奈良漬一枚で酔払う」「私は三枚までなら大丈夫」といった会話があったのです。先輩の言によると，本学御退官後，東京女子大教授となられてからずいぶん変られたとのことで，我々門下生の遠足に女子大生を連れて来て下さったり，東大時代は決してなされなかったのに，女子学生の就職の際は

先生も御一緒され挨拶されたので，その学生を引き受けた門下生の一人は，「先生がわざわざこられて，頭を下げられちゃ，ＯＫしないわけにはいかないよ」と笑っておりました。その後，川崎医科大学に移られてからは，それまで時間の無駄だとおっしゃって，あまり出席されなかった学会にも参加されるようになり，奥様とお二人で旅行を楽しまれました。

70才で川崎医大も退官されると，跡見女子大の非常勤講師を務められたほか，日本学士院会員として月一回の会合を楽しみにされていました。また月一回は教室に来られて，新着雑誌のコピーを持ちかえられて勉強されておられました。先生は英語に堪能で，門下生に限らず広く日本中の動物学者の論文を校閲されたため，直接先生の御指導を受けなくても，弟子を自認する者が多く，我々は先生といわず大将とおよびしていました。

医学部本館前にチョウセンホソオチョウが異常発生した時，一頭採集して差上げたところすぐ見に来られて，それからは毎年，発生時期を楽しみにしておられましたのに，昨年４月，不幸な交通事故に遇われ，一命はとりとめたものの意識が戻らず，長い闘病生活を送られていました。まだ論文の校閲，データの議論などお願いしておりましたので，この度の御逝去，誠に残念でなりません。包容力のあるお人柄と偉大なご業績を偲び，謹んでご冥福をお祈りします。